

思春期における高機能広汎性発達障害といじめ — 気づかれにくい異質性の理解とその対応の課題 —

松 永 邦 裕

I はじめに

文部科学省の調査（2013）によると、学校でのいじめは、小学校高学年から増加し、中学生でピークとなり、高校生になると減少する傾向がある。このような傾向は、思春期（前思春期を含む）の発達課題と深く関わっていると考えられ、その仲間関係の発達（変化）の視点からの理解が不可欠である。前思春期における「ギャンググループ」や「チャムグループ」などの仲間関係の形成は、仲間との一体感により、親からの自立をめぐる葛藤に対処する機能をもつ。しかし、同時に、この一体感は、同質性を強く求める傾向にあり、不安を惹起させる異質性に対しては排他的集団となる（清田ら2006、齊藤2011）。このような仲間関係のあり方が、特定の仲間を排除し、孤立させてしまうという「子どものいじめ」の背景となっている。

こうした同質性を指向する集団にとって高機能広汎性発達障害：High Functioning Pervasive Developmental Disorder（以下、HFPDDと記す）の子どもたちの異質性は格好の排除すべき対象となると考えられる。HFPDDとは、知的障害を伴わない自閉症と同質の社会性の障害を中心とする発達障害で、その中には、高機能自閉症、アスペルガー障害、高機能の特定不能のその他の広汎性発達障害の3者が含まれる（杉山ら、2004）。障害特性としては、社会性・コミュニケーション・想像性（イマジネーション）のいわゆるWing（1996）の三つ組で定義される障害であるが、他にも多動や注意の問題、感覚過敏などの特徴が併存することもあり、多種多様な状態像が存在する。近年の疫学調査では、広汎性発達障害全体は1%前後の高い罹患率が報告されるようになり（Wing 1996）、また、そのうち半分から4分の3が高機能群であることが明らかとなった（Chakrabarti et al. 2001）。HFPDDの子ども達は、言語発達やコミュニケーションの障害が、他の広汎性発達障害：

Pervasive Developmental Disorder（以下、PDDと記す）に比べ軽微であり、障害の存在に気づかれにくく、特別な教育的配慮もなされずに通常学級に在籍している。そして、「わがままな子ども」「しつけの問題」「家庭状況の問題」などとされ明確な診断が行われないまま年齢を重ね、知的レベルが高いにもかかわらず、やがていじめなどにより不適応に陥ると考えられる（相澤2004）。杉山ら（2004）は、HFPDDの社会適応について、「自閉症よりは良好であるとしても、自閉症圏独自の問題を抱えており、その知的能力に比して良好とはいいがたいものが少なくない」と指摘している。先行研究においても、通常学級に在籍するHFPDD児が激しいいじめの標的になりやすいことはこれまで多くの言及があり（表1）、また、多田ら（1998）、武井ら（2009）の調査でも、学習障害などの他の発達障害に比べ、HFPDDの子どもたちのいじめの体験が有意に多いことを指摘している。

表1 HFPDDのいじめを受けた経験の割合(先行研究)

報告者(報告年)	対象	いじめを受けた割合
多田ら(1998)	105例	79.0%
浅井ら(2007)	74例	56.0%
武井ら(2009)	289例	42.6%
平岩(2009)	34例(中学生以上)	70.6%

いじめ問題については、2011年の大津市での中学生のいじめ自殺事件をはじめ、社会的にも注目されているが、発達障害との関連性については、先にあげたような実態やそのメカニズムについて、徐々に明らかにされているものの、学校や家庭での理解やその対応についての検討は、まだ十分なされていない。

本研究では、通常学級に在籍する発達障害の中でも筆者が出会った対人関係などの社会性の障害を中核とするHFPDDの子どもの事例をもとに、HFPDDといじめに

ついて、障害特性（異質性）、学校文化、現代の思春期の友人関係、対応の課題の視点から、検討を行った。

なお、本論では思春期心性の発達の視点から、Blos (1962) が10歳から12歳頃に設定した前思春期を思春期の始まりととらえることにする。

II HFPDD の子どものいじめの事例

事例の提示にあたっては、保護者の了解を得ているが、匿名性を守るため、論旨に影響を与えない範囲で、細部に変更を加えている。

〔事例：中学1年生女子（来談時）、A子：高機能広汎性発達障害〕

両親、A子、祖母の4人家族。2年前より、父方の祖母と同居。母親は、専業主婦だが、祖母の介護をしている。

1歳半、3歳児検診で特に問題なし。始歩、言葉の遅れもなかった。3年間幼稚園に通ったが、入園時は、生き泳ることが多く、園の迎えのバスにも、泣いて母親から離れないことが多かった。特に、園の行事（宿泊を伴うお泊まり保育）など前は、発熱など体調を崩すことが多かった。年少時の運動会は、泣いて集団に入ることができず、担任の先生に抱っこしてもらい参加した。年中時になると、園の生活にも慣れ、通常通り登園ができるようになった。においや食感に敏感で、無理に口にさせると嘔吐することも多かった。また、アトピー性皮膚炎や喘息がひどく、欠席も多かったが、両親はA子のことを、敏感で病気がちな子どもとして理解していた。

小学校に入学すると、学校生活の決まりや先生の指示したことをきちんと行わないと気が済まない子どもだった。給食も苦手なメニューがあったが、頑張って食べていた（担任教師は、食べ残しを厳しく指導してはいない）。人前で話すのが苦手で、日直の当番は、前日から、緊張していた。小学校から帰宅すると、くたくたに疲れ、帰宅後すぐ寝てしまうことも多かった。毎年、クラス替えがあったが、新学期当初は、発熱や嘔吐をよく起こした。その度に、かかりつけの小児科を受診したが、学校の欠席も1週間に及ぶなど長期化することが多かった。（小学校ではどの学年においても、年間20～30日程度の欠席状況であった）。小学校高学年になると、A子は、クラスメートからいたずらをされたなどの訴えが多くなったが、母親は担任の先生へ相談し、担任教師の適切な対処のおかげで、どうにか登校することができていた。

中学校入学前のA子は、不安が高く、入学前の制服の購入時は、店先で泣き出すこともあった。入学後も友達ができず、移動教室時も一人で行動することが多かった。昼休みは、一人図書館で過ごしていた。入学後1ヶ月、A子は、自宅で頭痛を訴え、意識を失う。緊急入院し、MRI（磁気共鳴画像診断）や脳波などの検査をするが、医学的な所見はなく、原因はわからなかった。A子は、

退院後もたびたび頭痛を訴え、学校を休むことが多かったが、A子は母親に「学校行けなくてごめんなさい。怒っているでしょう？」と謝っていた。しばらく原因不明の頭痛が続いたが、ある日の通院後の帰り、A子は「学校が怖い」と言って母親に堰を切ったように学校での辛い気持ちを泣いて訴える。クラスメートから、無視や仲間はずれにされて辛いことを初めて母親に話す。そのようなクラスメートの行動に、A子は、ただただ黙って固まるだけで、クラスメートへ反論や担任教師への相談もできていなかった。母親も担任の先生に相談し、担任教師はクラスメートへの聞き取り調査も行ってくれたが、A子への顕著で深刻ないじめ行為の事実は見当たらなかった。担任教師は、「いじめ」としてとらえるというより、A子本人が被害的になっていて、気にしすぎであるとして受け取られ、本人の不安の高い性格の問題だと受け止められた。また、担任教師は、家庭訪問などでA子に個別的な対応を行ったが、「もっと強くならな」と励ますことが多かった。その後、A子は、不登校状態となり、筆者のカウンセリングを受けるため、来談する。知能検査などの心理検査を実施し、筆者の紹介で児童精神科を受診。高機能広汎性発達障害の診断を受ける。

III 考察

1. HFPDD という見えにくい障害特性（異質性）

PDDとは、社会性・コミュニケーション・想像性（イマジネーション）を中核とした障害であるが、他にも多動や注意の問題、感覚過敏などの特徴が併存することもある。したがって、多種多様な状態像が存在し、近年は、自閉症スペクトラム（連続体）として理解されるようになってきている。中でもHFPDDの子ども達は、言語発達やコミュニケーションの障害が、他のPDDに比べ軽微であり、障害の存在に気づかれにくく、通常学級に在籍している。そして、知的レベルが高いにもかかわらず、本事例のように学校生活に支障をきたすことになる。

事例のA子の場合は、入学や入園時、通常と異なる行事などの新規場面に不安と緊張が高まるという特性があった。また、小学校入学後も、クラスメートのかかわりの意図が読めず、些細なトラブルに対してどうしていいかわからず、ただ黙って固まってしまうこと（創造性・イマジネーションの障害）やにおいはじめ感覚が敏感で、他の子どもより、人一倍疲れること（感覚過敏の問題）などの特性が、学校生活での問題につながっていると考えられる。高橋ら（2008）の「発達障害の本人調査からみた学校不適応の実態調査」でも、「クラスメートから尋ねられたとき、とっさに判断することが苦手で固まったり、その場から離れたりしてしまう。困難な状況に遭遇したときに固まったり泣き出してしまい、それが、クラスメートからのからかいのもとになる。」また、「説明

を聞くだけでは理解することが困難であるために何度も聞き返すことがある」などの回答が多く占められていた。さらに、「学校や習い事で1日を終えて家に帰る頃にはへとへとになってしまっていて何もできないことがあるが、そのことが親に理解されず怠け者扱いされたりして辛い思いをした。」との回答もあった。これらは、A子のように、HFPDDの特性である創造性・イメージーションの障害、感覚過敏の問題に起因するものだと考えられる。そして、通常ではさほど負担にならないことがHFPDDをはじめ発達障害の本人にとっては著しく肉体的・精神的に負担となり、それによる対人関係の問題が、いじめにつながっていると考えられる。しかし、教師、クラスメート、さらに保護者までもが、家庭でのしつけや本人の性格などの問題として受け止めることが多く、周囲からの理解は得られない現状にある。

また、不登校状態となったA子の母親への発言にも見られるように、PDDに特有のルールを遵守するというまじめな特性が、学校を休んではいけないという観念となり、A子自身を追い込んでいると考えられる。このことは、A子の自己評価をさらに低下させているのではないだろうか。

2. 異質性を受け入れにくい学校文化

A子のようなHFPDDの子どもは、知的能力が正常で、未診断のまま通常学級に在籍している。しかし、その障害の特性が、社会性やコミュニケーションの問題にあるだけに、通常学級の集団の中での異質性や集団での浮き上がり方は顕著である。

辻井（2000）は、身体障害や知的能力以外の障害は、異文化性の問題と類似しており、日本においては異文化を取り扱う機会が乏しいだけに、こうした子どもたちへの対応が困難になりやすいと指摘している。さらに、藤川（2013）は、スクールカースト（学級内の階層の概念）という視点から、いじめは同質原理が支配する集団で起こりやすいと指摘している。

いじめは、思春期などの異質性が受け入れられにくい同質性を求める集団で起こりやすく、同質性を求める集団においては、異質なものを排除することによって、自分たちの同質性を保つ傾向にある。逆に、異質性が受け入れられる集団（例えば、興味関心に違いがあること、休み時間にやりたいことが違うこと、学習に得意不得意があること、落ち着いて他人の気持ちを察することが苦手な人がいること、不安や緊張の程度に個人差があること、など）では、互いが異なることがその前提にあり、異質なものを排除して、同質性を確認する必要はなく、いじめも生じにくい。

日本において、平成19年より始まった特別支援教育（インクルージョン教育）は、その基本には、異質性を受け入れる教育を目指しているとも考えられるが、実施

から7年目を迎えたこの特別支援教育も、通常学級担当の教員の意識は、上野・中村（2011）が指摘するようにまだまだ十分なものではない。また、学級集団の中で、教師の一部の子どもへの個別的な指導が、「特別扱い」とか「差別」と受けとられたり、少数の意見を尊重することで、学級集団のまとまりがなくなるなど教師にとっては悩ましい事情があると考えられる。HFPDDの異質性に起因するいじめは、その根底には、このような日本の学校文化の要因があると考えられる。

3. 現代の思春期におけるいじめとHFPDD

いじめが、発達段階から見て思春期特有の仲間関係のあり方から起こることについては、既に述べたが、現代社会においては、彼らの仲間関係の質そのものが変化しているという指摘もある。日頃、筆者の交流のある小中学校の教師からも、現代の子どもたちの仲間関係は「深い話題は避ける。」「友達によって話題を選ぶ。」などの声をよく耳にする。岡田（2007）は、現代の仲間関係は、「群れて表面的に円滑な関係を求める。」「お互いに傷つけないように気を遣う。」などの特徴を挙げている。現代の思春期の子どもたちは、自分も傷つきたくないし、他人も傷つけないという表面的な仲間関係を求め、一方で、関係性に餓え、しがみつきの仲間関係の維持のためにエネルギーを浪費しているように見える。岡田（2007）は、「自他を傷つけあわない、群れていることの安心感から成り立っている自己中心主義的な仲間関係」と指摘している。

また、日本におけるいじめ研究の第一人者である森田（2010）は、「いじめは関係性の病理」としているが、現代においては、障害のない思春期の子どもにとっても、仲間関係の形成と維持は難しい課題であるが、社会性やイメージーションの障害があるHFPDDの子どもたちは、他者の立場、集団の雰囲気を読み取りに失敗しやすいので、いじめのリスクはさらに高まると考えられる。また、このような仲間関係が存在する集団においては、いじめ問題の四層構造（森田・清水1994）における傍観者や観衆の存在を肯定し、いじめの仲裁者の出現を阻害する要因となるとも考えられ、いじめ問題はますます深刻化するのではないだろうか。

4. いじめへの対応のパラダイム転換

文部科学省が毎年発表しているいじめの認知（発生）件数調査の結果については、いじめの定義や調査方法が変わるごとに大きく変動している。しかし、しばしば指摘されるように（菅野1997、小林2011、藤川2013）、この背景には、いじめの捉えがたさや認識の違いが存在する。いじめの深刻さの感じ方には、子どもたちにも教師にも違いがある。このような認識の違いが、都道府県間のいじめ認知件数（文部科学省2013）の差（認知件

数の多い県は、少ない県の100倍以上の件数)にも表れている。

従来までの学校が行ういじめへの対応は、客観的調査に基づき、いじめの有無を明らかにし、対応がなされていた。しかし、HFPDDのような高い知的能力にもかかわらず、対人関係の読み誤りや文脈に沿った関係性の理解に課題がある場合には、客観的ないじめの事実がある場合にだけ介入するといった対応では不十分である。HFPDDのいじめの場合、これまで学校が行ってきた客観的ないじめの調査では、いじめとして認知されないケースも多くあると考えられる。教師や親は、HFPDDの子どもの話を頭から否定せず、HFPDDの子ども自身(当事者)の心的事実として受け止め、HFPDDの子どもの対人関係の未熟さや読み誤りを修正し、周囲の子どもたちにもそれを説明する必要がある。このような介入は、HFPDDの子どもを一方的にかばうという意味では決してない。このことは、文部科学省(1995)が示した「いじめ問題に関する基本認識」の5つの基本認識の中の「いじめられた子どもの立場に立った親身の指導をすること。」「いじめ問題は教師の児童・生徒観のあり方が問われている」にも準拠していると考えられる。

しかし、通常学級の教師がHFPDDに関する知識を十分持ち合わせていないことはやむを得ないことであるが、自閉症の概念すら正確に把握されていないことは珍しいことではない(多田ら1998)。そのような状況では、いじめられたというHFPDDの子どもの訴えは、客観的な事実把握の視点から、いじめ問題はなかったと切り捨てられ、本論の事例のA子のように、性格などのHFPDD本人の要因にいじめの原因が帰属され、教師や親は、「頑張れ」という励ましの指導を行ってしまうことになる。このようないじめへの対応は、HFPDDの不応(二次的障害)を深刻化させるのではないだろうか。

IV おわりに

本論では、いじめをきっかけに不登校状態となった通常学級に在籍するHFPDDの事例を提示し、HFPDDといじめについて、障害特性(異質性)、学校文化、現代の思春期の友人関係、対応の課題の視点から、検討を行った。HFPDDの障害特性から考えると、その異質性は、周囲に気づかれにくく、いじめなどのHFPDDの子どもたちをめぐる問題は、今後も大きな課題である。特別支援教育が実施されて7年目を迎えるが、本論のような、臨床的な研究だけでなく、学校教育、特に通常学級における特別支援教育のあり方についても、今後、様々な視点からの研究がなされる必要がある。

文献

- 相澤雅文(2004):高機能者広汎性発達障害児(者)と「不登校」「ひきこもり」の臨床的検討. 障害者問題研究, 32(2), 147-156.
- 浅井朋子・杉山登志郎・小石誠二・東誠・並木典子(2007):高機能広汎性発達障害の不応行動に影響を及ぼす要因についての検討. 小児の精神と神経, 47(2), 77-87.
- Blos, p. (1962): On Adolescence: A Psychoanalytic Interpretation. New York, Free Press. 野沢栄治(訳)(1971): 青年期の精神医学, 誠信書房
- Chakrabarti, S., Fombonne, E. (2001): Pervasive development disorders in preschool children. The Journal of the American Medical Association, 285(24), 3093-3099.
- 藤川大祐(2013): いじめ問題で学校はどう変わるべきか. 教育と医学, 61(2), 92-99.
- 平岩幹男(2009): いじめの背景に見えてくるもの、実際の相談を含めて. 日本小児科学会雑誌, 113(12), 1914-1917.
- 清田晃生・齊藤万比古(2006): アスペルガー症候群(障害)と不登校、家庭内暴力. 現代のエスプリ, 464: アスペルガー症候群を究める, 159-167.
- 小林正幸(2011): 学校メンタルヘルスから見たいじめの実態. 現代のエスプリ, 525, 69-77.
- 文部科学省(1995): いじめの問題の解決のために当面取るべき方策等について(通知).
- 文部科学省(2013): 平成23年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査(確定値)
- 森田洋司・清水賢二(1994): いじめ-教室の病-. 金子書房.
- 森田洋司(2010): いじめとは何か-教室の問題、社会の問題-. 中央公論社.
- 岡田勉(2007): 現代青年の心理学-若者の心の虚像と実像-. 世界思想社.
- 齊藤万比古(2011): 不登校・ひきこもりから見る現代のアドレッセンス. 精神科治療学, 26(6), 727-733.
- 菅野盾樹(1997): 教育にいじめはつきものか-いじめの認識のために-. 教育と医学, 45(2), 11-18.
- 杉山登志郎・河邊眞千子(2004): 高機能広汎性発達障害青年の適応を決める要因. 精神科治療学, 19(9), 1093-1100.
- 多田早織・杉山登志郎・西沢めぐ美・辻井正次(1998): 高機能広汎性発達障害の児童・青年に対するいじめの臨床的検討. 小児の精神と神経, 38(3), 195-204
- 高橋智・生方歩未(2008): 発達障害の本人調査からみ

- た学校不適應の実態. SEN ジャーナル (子ども・青年の発達の困難と支援)、14 (1)、36-63.
- 武井明・宮崎健祐・目良和彦・松尾徳大・佐藤譲・原岡陽一・鈴木太郎・平間千絵 (2009) : 不登校を呈した高機能広汎性発達障害の臨床的検討, 精神医学, 51 (3)、289-294.
- 辻井正次 (2000) : 学習障害と高機能広汎性発達障害の教育上のニーズ - 共通性と違い性 -. 発達障害研究、21 (4)、270-278.
- 上野光作・中村勝二 (2011) : インクルージョン教育に対する通常学級教員の意識について. 順天堂スポーツ健康科学研究、3 (2)、112-117.
- Wing,L. (1996) : The Autistic Spectrum: a Guide for Parents and Professionals. Constable and Company Limited, London. 久保絃章・佐々木正美・清水康雄 (訳) : 自閉症スペクトル—親と専門家のためのガイドブック、東京書籍